

---

# 氷天の波導騎士

ぱっつあん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷天の波導騎士

### 【Nコード】

N9097Z

### 【作者名】

ぱっつあん

### 【あらすじ】

異世界で勇者やって魔王を倒した……なんて言っただけが信じてくれるだろう。きっと誰も信じてはくれないに違いない。それでも俺こと「冬道かしぎ」は、異世界に召喚されて魔王を倒して、元の世界に還ってきた。そして普通の生活を取り戻した。そんなある日、俺は「超能力」なんてものに出会ってしまった。これは異世界で勇者と呼ばれた俺が、超能力者と関わっていく物語である。

## 1 1 「元勇者」(前書き)

最初のうちはわからない単語が出てくると思いますが、話が進むにつれて説明していきますのでご了承ください。

## 1 1 「元勇者」

「氷姫よ」

冷気が男を中心に竜巻のように渦巻く。

あまりの勢いに辺りが凍結していき、その中心に男は立つ。

真紅の瞳の瞳孔は縦に切り裂かれ、口元には獯猛な獣のような冷酷な笑みが浮かんでいる。

「天焦がす地獄の花束を！」

ただ渦を巻くだけだった冷気は、明確な狂気を持って男の視線の直線上にいる女を捉えた。

女は右手をゆるりと前へとかざす。

どこのものとも分からない文字が刻まれた巨大な薄紫の円形

魔方陣が展開され、男の放った氷花を防ぐ。

氷花は魔方陣に触れた瞬間、鼓膜が破れかねない音を立ててどんと碎け散っていく。

それはさながら花卉が散っていく花のようだ。

そしてそれは、女の視界を遮ることを目的としたような波導の使い方だった。否、それを目的としていた。

男は前傾の姿勢で走り出す。

着流しを走る勢いでなびかせ、両手で剣の柄を軽く握る。

その古風な男の見かけとは正反対に、騎士のような気高さを感じさせる剣の刀身からは、蒼白い波動がなぞるように放出されている。走る勢いを一切殺すことなく脚部に集中させ、人間とは思えないほどの距離と高さを飛躍する。

まだ剣の柄は握らない。

視界を遮る役割を果たしていた氷花は完全に消え去り、男の真紅の瞳と女の深紅の瞳がぶつかり合う。

「くたばれ、魔王オオオオオオッ！」

男……勇者となったその男は吼えた。

ついに勇者は剣の柄を強く握りしめた。剣を振り上げ、まるで泉から湧き出るように体内から溢れる波動を刃に乗せ、一気に振り下ろした。

女……魔王は左手を剣の軌道にかざす。再び魔方陣が展開され、勇者が振り下ろした剣を防ぐ。

瞬間、勇者の持つ剣の刀身が一瞬にして風化して、消滅した。

勢いを止めることができない体はそのまま魔王へと向かうが、それは片手で殴るように軽くあしらわれる。

「嘗められたものね。正面から私を崩せるとでも思っているのかしら？ 刃は砕けたわ。どうするつもりなのかしらね」

「……刃なら、まだここにある！」

首から下げた金の首飾りの鎖を無造作に引きちぎり、それを復元した。

先ほどの剣よりも神々しく、何よりも気高い『天剣』を片手に構え走り出した。

同時に魔王の背後から今までとは比べ物にならないほど巨大で、ミルクよりも濃厚な魔力を秘めた魔方陣が展開された。

いくつにも重ねられたように見える魔方陣。そのひとつひとつから薄紫の、魔力が大量に込められた弾丸が勇者に迫る。

しかしそれをものともしない。

刃で切り裂き、ただまっすぐに魔王へと駆ける。

「じゃあな。お前の大好きな　　終焉だ！」

『天剣』の刃が、魔王へと突き立てられた。

「あー……世界滅ばねえかな……。むしろ滅びろ……」

全てを包み込むような青空。ふわふわと浮かぶ雲を見上げながら、俺、冬道ふゆみちかしぎは呟いた。

どうしようもなく平和な世界。

目に見える争いはほとんどないのに、見えない場所の争いは指で数えても数えきれない。

そういうのはどうでもいいんだ。

目に見える争い、それも『戦い』って呼べるくらいの争いをした  
い。

不意に空を見上げる俺の視界が、純白に隠される。

「元勇者のくせに、何を物騒なことを言ってるのですか」  
純白を凝視する。

ヒラヒラのレースが取り付けられた純白のそれ。

思考にしてそれが何であるか気づくまで一秒もかからない。

「……狙ってんのか？ そうやってパンツ見せんの？」

「……見ましたね？」

「見せてるんじゃないんだ？」

制服のスカートの端を押さえ、顔をわずかに顔を赤にさせる藍霧  
あいきり  
真宵後輩。  
まよい

腰の辺りまで伸ばされた黒曜石のような髪を、サイドテールに纏めて  
ている。高校一年にしては小柄な体をさらに小さくして俺を睨んで  
いる。

可愛いというより凜としているという顔立ちなのにこの行動のギャ  
ップが、この私立桃園高校で人気を集めている要因に違いない。

もつとも、俺はそんなのには微塵も興味はない。

「だいたいよお、お前のパンツなんか見飽きたつての。あつちで何  
回見せられたと思つてんだよ」

「別に見せたかったわけじゃありません。なんですか、そうやって  
あたかも私が見せたような言い方をして」

「動くつて分かつてんのにあんなヒラヒラした格好してたんじゃない、  
そうとられても仕方ねえんじゃない？」

「かしぎ先輩がちゃんと動かないからです。なんで後衛の私が前に  
出ないといけない状況になるんですか」

「うつせえな。怪我してねえだけマシだろ？」

「ごろりと寝返りをうち、わずかに頬を膨らましている真宵後輩を視界からはずす。」

「ちやーんと、俺はお前を護ってたろ？」

「む。確かにそうですけど……」

すねたような声が後ろから聞こえる。

「ただまあ、あんときは悪かったと思ってるよ」

「かしぎ先輩……」

「お前のパンツ見たさにわざと手加減して戦ってたからな。調子乗りすぎて俺も怪我したし」

「やっぱりわざとだったんですねっ！ だと思いましたよ。先輩がそう簡単に後ろに通すとは思えませんから」

「妙な信頼寄せられてんのな、俺」

「いたずらっぽく告げると、また後ろから「むむむ……」なんていうすねたような声が聞こえた。」

前々から思ってたけど、こいつって面白いよな。

真面目だから正反対の俺と妙にかみあう。こうやって、からかってみると楽しいし。

「……で、真宵後輩はいつたいこんな場所で、何をやってるんだ？」

「そういう先輩こそ、不良みたいな真似をして屋上に寝てるなんて、何をやってるんだと訊かれてもおかしくはありませんが？」

「俺はいいんだよ。還ってくる前からだからな」

「答えになってませんが」

真宵後輩はそう言いながら、俺の隣に座ってきた。

俺と話すために来たのかどうかと訊かれたら、間違いなく違うと答えるだろう。

別に、真宵後輩は俺と話したいから座ったんじゃない。

この場所が好きだから座っただけなんだ。

俺も、ここに真宵後輩よりもあとから来たとしても、今やっていくように寝転がって空を見上げてたはずだ。

「別に理由なんてない。ただ、来たかったから来ただけだ」

「奇遇ですね。私もです」

「いいのかよ。一学年で成績トップのお前が、こんな場所でサボっててもよ」

「どうなんでしょうね」

「俺に訊くな」

答えられるわけないだと付けたし俺は、ただぼんやりと空を眺めた。

特に真宵後輩と会話があるわけじゃないが別に、気まずいとかいう雰囲気があるわけじゃない。

認めるのは非常に癪に障るが、こいつが黙って隣にいただけで、安心できる。心が安らぐ。落ち着いて、ぼんやり出来る。

緩やかにふく風が真宵後輩の髪を揺らし、シャンプーらしきいい匂いが鼻をくすぐる。

こいつも同じようなことを思っているかは分からないが、少なくとも、俺はこいつがいるだけで安心することができる。

青い空。白い雲。桜の花びら。

平和だ。とても平和だ。

これが当たり前だった頃は、何も思わなかった。

だけど、この当たり前前が当たり前前じゃないところを見てしまったから、この当たり前前がとても幸せのように感じる事が出来る。

でもそれと同時に、抱かずにはいられないものもある。

「……暇、ですね」

唐突に、真宵後輩は呟いた。

「ああ、暇だな。ホントに退屈だ。思わずあくびが出ちまうくらいにな」

「なんだか未だに実感がありません。還ってきたという実感が」

「これまた奇遇なこともあるもんだ。俺もだ。なんだか、夢でも見てるんじゃないかと思う」

暇、なんていう表現の仕方をしていいなら、俺たちは凄く暇だ。



何か明確な目的があつて、ただそれに向かつて突つ走ることな  
ければ、誰かに襲われることを警戒する必要もない。

ぼんやりとしてても何も起こらない。せいぜい、サボっていたこ  
とを見つかつて叱られる程度だ。

俺たちはそんな当たり前な日常が暇なんだと思う。

「一度高みを見てしまうと、それより低いところはつまらなく思え  
る。そんな感じでしょうね」

「高み、ねえ。言いようによつちや、確かに高みなんだろうよ」  
でも、と言葉を紡ぐ。

「こいつは高みとかそういうのじゃなくて、刺激が足りないってだ  
けなんだよな」

「認めたくはありませんが、そうなんでしょうね」

どことなく寂しさを感じさせるような口調で、真宵後輩は同意し  
てきた。

俺の目に見える真宵後輩の背中も、寂しそうに見える。

「あれだけ還りたい還りたいって言つてたお前が、還つてきたら来  
たでそんなこと言うなんて思わなかつたぜ」

「私だつて、こんな風に思うだなんて思いませんでした」

最初の頃はあんなに還りたがつてたのに、最後には還るのを迷つ  
てたくらいだからな。

やっぱり五年間もいれば、それなりに愛着も湧いてくるってこと  
か。

「別にこの日常に不満があるわけじゃありませんけど、なんだか、  
つまらないです……」

「子供みたいな言い分だな。まあ、それを感じてんのは、俺も一緒  
なんだよな」

「……つまらないですね、かしぎ先輩」  
「そうだな、真宵後輩」

とりあえず名前を呼びあつてみる。

特に意味はないけど。

こんなものじゃ暇潰しにもなりやしない。  
流れていく雲を目で追いながら、俺は言う。

「この日常をつまらないなんて思うのは人生に絶望を感じてる廃人か、俺たちくらいのもんだろうよ」

「廃人と同列に扱わないでください」

「気にすんなよバカ。普通に暮らす普通の奴らは、この普通の日常で普通に満足できる。でも、俺たちは違っちまったわけだ」

きっかけは些細な偶然だったのかもしれない。

選ばれたのが俺や真宵後輩じゃなかったら、今こうしてこんな会話をしたこともなかっただろうし、する必要もなかった。

ほんのちよつとの偶然が、住む世界を一八〇度変えてしまったんだ。

「こんな体験した人間なんて、全人類探しても俺たち二人くらいだ。俺たちは、ちよつとばかり普通から離れちまったのさ」

「どうして、私たちがだったんでしょうね」

「さあな。意味なんてなかったんじゃないか？」

俺たちはこのちよつとの偶然から、偶然出会った。

それまでは接点なんかなかったし、俺は真宵後輩を知ってても、あつちからしたら分からない。

その程度の、関係と呼べるかすら分からない関係だった。

どうしてこの二人だったかなんて、偶然としか言いようがない。

「ただ呼ばれて、知り合って、今こうして話をしてるなんてのは全部が全部、偶然なんだ」

「偶然、ですか」

「そう、偶然。俺とお前が人間で、この場所で出会えたくらいのな。そんな確率の偶然が、俺たちを巻き込んだ」

こんな偶然があったから、俺たちは知り合えた。

話すような関係になった。

お互いを知らなかったはずの俺たちが背中を預けあって戦ったり、手を取り合って目的に向かうことになった。

そんな全ては、ただの偶然。

「あつちの皆は、元気にしてるでしょうか？」

「分かんねえ。あつちから喚ばれでもしなかったら、俺たちはあつちに行けねえからな。気にしなくても、あいつらなら元気にしてるだろ」

バカだからな、と呟くと真宵後輩に笑われた。

なんだよ。笑うことないだろ。

「離れてても心は繋がってる……そう言ったのはどこのどいつだよ。全然繋がってねえじゃん」

「悪かったですね」

「嘘だよ。すねんなバカ」

「すねてません」

嘘だろと思っただけど、あえて口にはしない。

口にするようなことでもないし、旅をしてるなかで真宵後輩がこっぴどく言われたらすねてるのは学習済みだ。

「チトルは女の尻でも追っかけてんじゃね？」

「有り得ますね。というか、それしか有り得ないでしょうね」

女の子が大好きで、モテるために仲間になった狙撃手を思い浮かべる。

ただの色ボケ野郎かと思ってたけど、あいつの狙撃の腕は超一流だったっけな。

「ジエイドは先輩に勝てるようにと、今ごろ鍛錬尽くでしょうね」

「しつこいからな、あいつも。どうせ俺には勝てないっつのに」

俺の好敵手ライバルと呼べるような強き死神を思い浮かべ、苦笑するしかなかった。

あいつがいたから、俺も強くなることが出来た。

やっぱり好敵手ライバルって大切だよな。

「エーシエは最後まで還らないでって泣いていましたが、泣き止んだでしょうか？」

「さすがに泣き止んだろ……」

とても仲間思いで、何よりも仲間を大切にする少女がいた。そいつは最後、俺たちが還るときにはわんわん泣いていて、なだめるのが大変だった。

あつちで一番最初に仲間になって、一番長く旅をしてただけあって、別れるのが辛かったのを覚えている。

でも最後は、俺たちを笑って見送ってくれた。

「皇女様にあんなに感謝されて、むず痒かったですね」

「感謝されることに慣れてねえからな」

俺たちを呼び出した皇女様。

あの人がいたから、全ての偶然は始まった。

他にもたくさんの人々と関わってきた。助け合ったり笑いあったり、ぶつかったり。関わり方は色々だけど、確かに俺たちはあそこ

にいたんだ。

「いつかまた、会える日が来るといいな」

「今度は私たちの日常を見せてあげたいですね」

「あいつらが見ても面白くないと思っぜ？」

「いいえ。きつと喜びますよ」

「そうだといいけどな」

上半身を起こして、風をその身に受ける。

やっぱり、俺たちは還ってきたんだよ。俺たちがあるべき日常の世界に。

それでも、あつちでの五年間は、目を瞑れば昨日のことのように思い出すことが出来る。

今まで生きてきたなかで、もっとも楽しくて過酷な五年間。

たくさん仲間と思いついた五年間でもある。

「元勇者、か。そんな称号、こつちじゃなんの意味もないんだよな」

「そうですね。そんな肩書きがあっても、進路には意味がないですから」

「だけど、こつちは意味はあるよな」

言いながら、俺は制服のポケットから金色の水晶の首飾りを取り

出して、真宵後輩に見せる。

「……持ってきたんですか？」  
『天剣』てんけん はあつちの伝説の剣なんですよ？」

「伝説の剣だろうとなんだらうと、勇者専用の武器なんだから俺がもらうのは当然だろ？」

勇者専用の武器を、他の奴が使えるわけじゃないんだし、俺が持ってた方がいいに決まってる。

それに、俺だけにそれを言うのは筋違いだ。

俺は真宵後輩の首から下がる首飾りを指差す。

「お前だつて『地杖』ちじょう 持ってきてんじゃねえかよ」

「……こ、これは私専用なんですから私が持つてて当然です」

「ほれ見ろ。第一に、あの皇女様が何も言つてなかつたんだから大丈夫だつて」

今さら言つたつて『天剣』も『地杖』もこつちに持つてきてしまったんだ。仕方がないし、持つてくるのは当然の権利だ。

またこの二つが必要になったら、きつとあの皇女様は俺たちを喚びだしてくれるに違いない。

だからこそ、俺たちが持つてる必要がある。

「あつちの話をしてたら、きりがないですね」

「話題が尽きなくていいじゃんか。楽しいし」

「ふふつ。かしぎ先輩らしいですね」

口元を押さえて楽しそうに、真宵後輩は笑う。

あつちの話をしてると、話題が尽きなくて楽しいな。

冬道かしぎと藍霧真宵。異世界に召喚され、勇者として剣と杖をとつた二人。

そんな俺たち二人は今、召喚された目的を果たして、還ってきたんだ。

勇者の証である『天剣』と『地杖』を持つて、俺たちの世界に。

もうあんなことには巻き込まれはしないだろうけど、その経験はちゃんと思い出に刻まれている。

だから今日も、俺と真宵後輩は授業をサボって異世界について語り合おう。

## 1 2 「普通の日常」

私立桃園高校に通う俺こと冬道かしぎは、後輩の藍霧真宵と共に異世界に召喚された経歴を持っている。

何の前触れもなく、接点のない俺たちは、同じ場所に喚び出された。

淡い光に包まれたと思えば、次の瞬間に目の前に広がっていた光景には、あときは驚かされた。

中世の欧州ヨーロッパの城みたいな場所に、俺たちはいたんだ。

目の前には褐色で容姿端麗な美女がいて、その人がヴォルツタイン王国の皇女様だったわけだ。

正直なところ、わけが分からなかった。

いきなり光に包まれたと思えば、見知らない場所に、学校のアイドル的な扱いを受ける後輩がいたんだ。

こんな状況をすんなり理解できる奴がいたらぜひとも会ってみたい。

……ああ、隣にいたっけな。全然動じなくて、無口無表情で皇女様に状況説明を促した後輩が。

何とか気を取り直した俺たちは 真宵後輩は最初から冷静だったが 皇女様からこの状況の説明を受けた。

俺たちは二人は、復活した魔王を倒してもらうために、異世界から召喚された。

簡単かつ明確に説明したらこんな感じだ。

皇女様がお決まりの能書きをべらべら話してたが、そんなのは聞き流してた。意味なんてなかったし。

問題になるのは、俺たちみたいな平和な世界から召喚した二人で、魔王を倒せってことだ。

精鋭部隊やら何やらが束になって戦って負けたのに、なんで俺た

ちに世界の命運をかけるのか。

しかも魔王を倒さないと元の世界に帰れないなんても言われて、いきなり宿題を押し付けられたみたいだった。

もちろんそんなことが出来るわけないのに、戦うことなんか出来ないのに、俺たちは可能性を示してしまった。

魔王を倒すことが出来る伝説の武器である『天剣』と『地杖』を、俺たちは使ってしまったんだ。

ただがむしやらに、自分の身を守るために剣と杖をとった俺たちは、その瞬間に唯一、魔王を倒せる存在になった。

あのときは、魔王を倒せるなんて思ってたが、今こうして生きてるってことが倒せた証明になってるんだよな。

魔王に止めをさしたこの『天剣』も、それを最後に使っていない。使うような場面がないって言った方が正しいな。

魔王を倒したあとは国を上げて祝杯をあげて、お祭り騒ぎに便乗して、こっちの世界に還ってきた。

剣をとるような場面は、あれからはない。

そんな場面に出会うなんて、もうないんだと思う。

平和で『戦い』のないこの世界で、剣をとる必要なんてないから。あのときは剣なんかいらさない、元の世界に還れるだけでいいだなんて言ってたが、今ではなんだかそれが寂しく感じる。

五年間、俺は『天剣』を手にして戦ってきた。

でも、還ってきたらそれはたったの五時間程度のことではなかった。

生き残るために鍛えた肉体も、死にかけるような怪我を負った傷も、五年間で成長した身長も、還ってきたら元通りになってた。

夢かと思っただが、やっぱり夢じゃない。俺の手には、五年間を共に過ごした『天剣』があつたから。

元勇者、確かにその通り。

今の俺は『天剣』を持つてるちょっと普通とは違う高校生だからな。



そんな俺は、今、普通の生活を送っている。

「兄ちゃん、朝だから早く起きな……って、もう起きてたのかよ」  
俺の部屋のドアを開けて入ってきたのは、妹の冬道つみね。

栗色の髪をショートカットにして、俺とはあんまり似てない勝ち気な表情をしている。

中学三年生にしては、大人びてる容姿は人気を集めているらしい。

「なんだ。俺が起きてたらおかしいのか？」

「前までだったら早起きなんかしてなかったから言っただけ」

「そうかい。んじゃ、さつさと朝飯でも食って学校に行くと思いますか」

「兄ちゃんが学校行ってもサボるだけじゃないの？」

「うっせえ。別にいいんだよ」

俺はつみねと会話しながら、リビングに向かうために階段を降りる。

廊下を曲がり、ドアを開ける。

目の前に広がる光景は、最近ようやく慣れてきた我が家のリビングだ。

テーブルにソファ、テレビと一般家庭にありふれた家具があるだけで、特に変わった物は置かれていない。

「もう朝飯出来てるから、さつさと片付けて」

「兄に対する言葉遣いじゃない気が……」

「いいじゃん。兄妹なんてこんな感じじゃない？」

イスに座りながら、つみねは言ってくる。

いい匂いが鼻をくすぐる。テーブルの上に用意された朝飯から漂うものだ。

味噌汁に魚、納豆とまさに日本人食だ。

「でも、兄ちゃんが朝飯の注文してくるなんて思わなかったよ」

「むぐ？ ……別に朝飯の注文くらいしたっておかしくねえだろ。

俺だって人間だぜ？」

未だに懐かしいと感じる日本人食を口にしながら、俺は間違っ

ことを言う。

それにしても、つみれの飯は相変わらず美味しいな。

「確かにそうだけども、この前まで飯なんか適当でいいって言うってたし、食べないときもあったからさ」

それに、と言葉を区切る。

「前までなんか取りつく島もないって感じだったし。いきなり朝飯の注文してきたときなんか、別人かと思ったよ」

「心境の変化って奴だ。そういうときもある」

「ふーん。心境の変化、ねえ……」

疑いの眼差しを向けてくるつみれに苦笑しながら、黙々と朝飯を進めていく。

形のいい眉を歪めながら、つみれは箸をくわえて俺に何があったのかを考えてるってところだろうか。

ヴォルツタイン王国に召喚される前は、確かに取りつく島もないって感じだった。不良まではいかないものの、問題児くらいには映ってたと思う。

何かを思いついたのか、くわえてた箸を俺に突きつけながら、微妙に核心をついてくる。

「分かった。あの最近一緒にいる黒髪の人でしょ？」

「そうだと言えば、そうなるが、そこまで関係はしてねえ。いや、関係してるかな……」

「どっちだよ……あむ」

どっちだよって訊かれても、真宵後輩とは旅を一緒にしたってだけで、心境の変化までには関係してない……はず。

ヴォルツタイン王国に召喚されて、旅に出て、一緒に戦って、魔王を倒した。

そうやって考えてみると、俺の後ろにはいつも真宵後輩がいた。

真宵後輩が後衛でサポートしてくれてたから、俺は安心して戦うことが出来た。

『天剣』なんていう伝説の剣を持ってても、戦い方は素人なんだ。

背中を預けられる人がいたから、こういった心境の変化があったのかもしれない。

認めるのは癩だが、たぶん、真宵後輩のせいだな。

「その首飾りもその人から貰ったんだろ？」

「あ？　なんでそうなんだよ」

「だって、あの人もおんなじのつけてたし。兄ちゃんは金、あの人は銀。形はちよつと違ってたけどさ、おんなじ物だろ？」

「お前、よく見てんのな……むぐ」

俺たちがお互いに『天剣』と『地杖』を持ち帰ってきてたのを知つたのは、還ってきてから三日が過ぎた頃だ。

それからは首にかけてるって言っても、ただか十日程度。

つみれは真宵後輩とほとんど会ってないのに、よくそんなところまで見れたもんだよ。

「そう言うのって目に入るもんじゃない？」

「俺には入らんけどな」

「兄ちゃんはそういうのは無頓着だからだって。そんな兄ちゃんが首飾りなんてやるわけないじゃん。やっぱりそれ、あの人に貰ったんだろ」

「違つての。同じものつてのはあつてるけどな……むぐ」

「じゃあ、選んでもらったとか？」

朝飯に手をつけることも忘れて、つみれは俺に質問攻めをしてくる。

「ここ最近、朝はこの話題ばかりだよな。」

目がキラキラしてて、興味津々なのが嫌ってほど伝わってくる。

「……なんでそんなに気になんだよ。別におかしくないだろ？　俺、

一応高二だぞ？　オシャレのひとつでもやるって」

「なんで気になるって訊かれたら、あたしが兄ちゃんの妹だからさ」

……意味が分からん。なんで妹だから真宵後輩のことが気になるんだよ。

「将来のお義姉さんになるかもしれない人のことを知りたいって、

当然の感情だと思うけど？」

「恋人にもなつてねえのに、嫁になる予定なのか」

「まだ恋人じゃないの！？ 毎朝迎えにくるのに！？」

両手をテーブルに叩きつけて立ち上がりながら、つみれは驚いた声を上げていた。

そこまで驚くようなことでもないと思うんだけどな。

「毎朝迎えに来るからって恋人とは限らねえだろ？」

「だって幼馴染みでもないのに毎朝だよ！？ 普通に考えたら恋人だとか思うだろ！？」

「そんなもんか？ 家が近いから来るとかじゃね？」

「家が近いからって普通は来ないって。はあ……兄ちゃんって、もしかして鈍感なのか？」

「さあね。……ごちそうさま」

俺は両手を合わせて、会話を終わらせるように朝飯を終わらせる。あつちじゃ鈍感だなんて言われたことはなかったけどな。

だいたい、あいつが俺のことを好きだとか、そういう感情を抱いてるはずがない。

俺もそうであるように、ただ単に一緒にいたいだけなんだよ。

「あつ、逃げんなよ兄ちゃん！」

「分かった分かった。早く朝飯を片せって言ったのはお前だろ？ お前も早くしないと遅刻するぞ」

「む。明日は絶対聞き出す！」

妙に意気込んでいるつみれは、朝飯を口の中にかき込んでいく。

聞き出すなんて言われても、これが俺と真宵後輩の関係だし、異世界に召喚されて一緒に戦ったなんて言っても信じられるはずがない。

ただ、恋人なんてのよりは深い関係を築き上げてしまったとは言える。

ブレザーを羽織り、鞆を持って準備完了。

すると、まるでタイミングを見計らったかのようにチャイムが家

の中に響き渡った。

「タイミング、バッチリだよな。どっかから見張られてる？」

「んなわけねえだろ」

とは一概には言えない。

あいつのことだから、見張りなんてのは意外にやりかねないんだよ。

俺はつみれに「遅刻すんなよ」と一言だけ伝えようと、急いで玄関に向かう。ドアを開けて、外に出る。

「おはようございます、かしぎ先輩」

礼儀正しく挨拶してきたのは、もちろん真宵後輩だ。

「おはよ。……今日も時間バッチリだったけど、まさかとは思いが見張ってたりしてないよな？」

「なんで私がそんなことしないといけないんですか。やる意味がありませんし、やる必要もありません」

「だよな。お前ならやりかねないから、心配してたんだよ」

「どつという意味ですか、それ」

真宵後輩に「何でもねえよ」と答えながら、学校に向けて歩き出す。

真宵後輩の首からは、十字架のような形をした透き通るような銀色の首飾りが下がっている。

俺がこの首飾りを見ていないのは、もう見慣れているからだ。

「なんですか、そんなにじろじろ見たりして。私の制服姿はそんなに珍しいですか？」

「珍しいってよりも新鮮だな。パツと見だの間違つかもしれねえな」

「そんなに私の制服姿は新鮮なのですか……。確かに私からしても先輩の制服姿は新鮮ですから、おあいこですかね」

相変わらず無表情を貫きながら、俺たちだけに共通する話をする。

「それにしても不便です。動きにくいです」

「あつ、それは俺も思った。あつちじゃもつと動きやすい服だったから、改めて制服来てみたら動きにくいんだよな」

「私はスカートですから先輩ほどの違和感はないと思いますが、やはり妙な感じですよ」

制服のスカートの裾を指でつまみ、すぐに離す。  
なかなか慣れないもんだな。二週間近くも制服着てるけど、違和感がありすぎて落ち着けない。

あつちの世界じゃもつと違う素材で出来てる、着流してみたいなので過ごしてた。それなのに生地が頑丈で、どれだけ激しい動きをしても破れるなんてことはなかった。

動きの妨げになるようなこともないし、着たときにまるで違和感を感じない。

真宵後輩はミニスカートだったけど、やっぱり違うんだろう。

「あつちの素材で制服も作ってもらえばよかったです」

「その考えはなかった。そうすりゃ、こんな着心地の悪さを感じることもなかったか」

俺たちが喚び出されたときは制服姿だった。

替えの服なんて用意してる暇もなく初めての戦いを経験してしまったから、そのせいで制服は見るも無惨な姿になった。

そのあとに俺は着流し、真宵後輩はスカートを受け取ったんだ。帰りに制服を直してもらったんだが、真宵後輩の言う通りあつちの素材で作直してもらえばよかった。

「けどそんな余裕もなかったし、仕方ねえよ」

「そうですね。あの冬道かしぎ先輩ですらも、別れ際には泣きそうになっていましたからね。制服なんかに拘っている余裕なんてないでしょう」

「……うっせえ。お前なんか号泣してたろ」

「……うるさいです。恥ずかしいから思い出させないでください。あんな姿を先輩に見られたのは一生の恥です。黒歴史ですよ」  
「そんじゃ痛み分けてとこだな」

あのときのことを掘り返されるのは、お互いに恥ずかしい。

普段はクールキャラで通してる真宵後輩からしたら、別れの場面

だからとはいえ、あそこまで号泣したのは言われたくないことだ。  
俺は単純に、男として言われたくないっていう理由だが。

けどまあ、今まで旅をしてた仲間ともしかしたら一生会えなくなる別れだったんだから、泣いてしまうのは仕方ないと思う。  
誰だって、一生の別れは辛いものだ。

「ときに真宵後輩よ」

「なんですか、かしぎ先輩」

「こつちに還ってきてから『地杖』、使ったりしたか？」

「使はずがありません。『地杖』をこつちの世界のどこで使えて言っんですか？ 日常生活で使うような場面ありませんし」

「俺の『天剣』よりは使えると思うぜ？」

『天剣』は文字通り剣だから、それこそ使う場面なんてものに巡り会えるはずがない。

それに引き換え『地杖』は戦う以外にも使える場面があるんだから、使っても不思議ではない。

「そうでしょうけど、普通に考えて日常では使えません。どんな事態に巻き込まれるか分かったものではないですから」

「そんなもんなのか？ …… 使えそうに使えねえな、これ」

首からぶら下がる剣の形をした金の首飾りを摘まみながら、素直な感想を述べてみる。

「当たり前でしょう。『戦い』を前提としたものを、日常のどこに使うんですか。喧嘩にでも使う気ですか？」

「それも考えたんだが、並大抵の奴には負けないから意味ねえんだ」

「考えたんですか……」

真宵後輩は呆れたように俺を横目で見てくる。

考えたっていつても、使う場面にならないから意味がない。というよりも使う場面になれない。

肉体が鍛える前に戻ったっていつても、反射神経までもが元に戻るわけじゃない。だから、喧嘩になっても相手の動きが手に取るように分かるからすぐに終わってしまう。

力の入れ方も、どこを狙えばいいかも分かるから、今のところ巻き込まれた喧嘩じゃ負けなしだ。

あっちに行く前の俺は何をしてたのか、喧嘩に巻き込まれるなんて日常茶飯事だ。

今じゃ、不良に見られたら頭を下げられるくらいだ。

いわゆる、不良たちの頂点に立ったってことを意味する

元勇者が不良たちの頂点だなんて、奇妙な話だよ。

「冗談だ。そこの雑魚に使うわけねえよ」

「こつちの世界で先輩が『天剣』を使うような場面になったら、どうなるか分かったものじゃないです」

「そしたらお前も『地杖』を使えばいいだろ？」

「そんな場面に出会ってみたいものですね」

俺は「そりゃ無理な話だ」と肩をすくめた。

元勇者の二人が『戦い』がない世界で『天剣』と『地杖』なんか使ったら、町のひとつやふたつ、簡単に地図から消え去るぞ。

「そういえば、あのニユースを見ましたか？」

「あのニユースなんて言われても分かんねえよ」

ニユース自体見てないから、内容言われても分からんだろうが。

「失礼しました。私も偶然目に入っただけなんですけど、人が誰かに襲われてたというものでした」

「……誰かに襲われたって、通り魔とかか？」

「あまり興味がないみたいです」

「んー……興味がないって言えば興味なんてねえんだけど、今さら通り魔とか言われてもな」

「確かに、そうでした」

俺たちは通り魔どころか、魔獣とかモンスターとか、魔王と戦ったことがある。

こつちからしたらニユースに上がるようなことだろうけど、あっちからしたらそれが普通だった。

食つか食われるか。殺すか殺されるか。



そんな環境に身を置いてただけに、通り魔と言われてもいまいち反応の仕方が分からない。

「それでは先輩は通り魔に襲われても返り討ちにしないようにしてください」

「あんな、通り魔になんてそう簡単に会えるもんじゃねえぞ？」

「もしもの話です。先輩の場合、通り魔に襲われでもしたら、通り魔の方が心配です。先輩なら逆にボコボコにしまいそうですから」

「一般人をボコボコにするような真似はしねえっての」

俺からしてみたら通り魔でも一般人程度にしか見えない。

ただナイフを持って襲ってくるだけ、その程度の一般人。そんな相手をボコボコにするようなことはしない。

「むしろ俺はお前の方が心配だ」

「……な、なぜでしょうか？」

「なぜって、そりゃ俺は前衛で戦ってたから通り魔なんかじゃ負けねえけど、後衛で戦ってた真宵後輩は『もしも』ってことがあるからだよ」

「む。私だって通り魔なんか遅れをとるような失態はしません」

俺の言葉が気に入らなかつたのか、真宵後輩は口先を尖らせていた。

「俺だってお前が遅れをとるとは思ってねえよ。それでも心配なもんは心配なんだよ。お前には怪我なんかしてもらいたくねえし」

素直な気持ちだ。真宵後輩が通り魔なんか遅れをとって怪我するとは思えないが、それでも絶対とは言い切れない。

俺がいつでも側についてやる事が出来れば、そんな心配はないんだが。

「……」

「なに黙りこんでんだよ」

「何でもありません。先輩に心配されるなんて、私もまだまだだと思っただけです」

「あつそ。まあ、怪我だけはすんなよな」

俺は言いながら、隣を歩く俺の胸辺りまでしか身長がない真宵後輩の頭に手をのせる。

「や、やめてください。こんな往来の場所で……。恥ずかしいですよ」

「照れることねえだろ」

真宵後輩に弾かれて行き場の失った手を開閉させる。

会話をしている間に俺たちが歩いていった桜の並木道を抜け、目線の先には私立桃園高校が見えてきた。

私立桃園高校なんて名前だが、別に三國志の英雄は関係していない。

ただ、そこに咲く桃色の花は全国的に有名で、それを見た人間を魅了するほどには美しい。

入学の季節にはちょうどいい、祝いの花みたいな存在だ。

「ではまたあとで。失礼します、かしぎ先輩」

「ああ、またあとでな」

校門を抜け下駄箱に到着した俺たちは、靴を履き替えると反対方向に向かって歩き出した。

一学年は左側の廊下、二学年は右の廊下の先にそれぞれの教室がある。

そして三学年の教室は、下駄箱の正面にある廊下の先にある。

だから俺は右に曲がったわけだ。

「はあ……。よし、行くか」

真宵後輩と別れて若干の寂しさを感じるが、それをため息に乗せて吐き出し、廊下を踏みしめた。

### 1 3 「学校」

綺麗に掃除され、春休みにワックス掛けをされた廊下を歩く。踏みしめる度に内履きと廊下の表面が擦れる音が俺の耳に届いてくる。

それを不快に思ってしまうような繊細な神経はしていないが、「自分はここにいるよ」と強調しているようなこの音は何だか考えようによっては、注目してもらいたい人が発しているように思える。

しかしあいにくと、この廊下を歩いていたのは俺ひとりだったため、誰ひとりとして注目するような人間はいない。

教室のドアの上に取り付けられたクラスが書かれたプレートを確認し、廊下の一番奥にあたる「2 A」のドアの前に立った。

ドアに手をかけ開くと、俺の目の前にはクラスの光景が広がっていた。

学年がひとつ上がってクラスメイトが変わってしまったが、二週間近くの時間は仲良しグループを分けるには十分すぎる時間だ。

一学年のときから仲のよかった奴ら。

新しく仲のよくなった奴ら。

そんな奴らがいくつかのグループを作って、それぞれの話題で盛り上がっている。

そして俺もまた、仲良しグループっていうのに漏れずに入っていたりする。

俺の席は窓際の後方から二番目という、みんなが欲しがる居眠りをするための特等席だ。

窓際だけに窓から空を見上げること、外の風景を見ることが出来るから、授業に飽きたときはそうやって時間を稼いだりできる。

ただ、俺は教室じゃなくて屋上でサボることの方が多いから関係なかったりするのだが。

俺は会話をするグループの脇を通り抜け、自分の席に着く。  
と同時に、後ろから体重がかけられた。

「おはよー、冬道。今日も相変わらずの重役出勤で何よりだぜ」

「重役出勤ってなんだよ。重いから退け、柎」

「いいだろ？ スキンシップだよ、スキンシップ。こっやって愛情を育むのさ」

「気持ち悪いぞ、バカ。お前となんか愛を育みたくはねえよ。さっさと退け、重い」

「うっわ、ヒデエ。その言葉は普通に傷つくぜ？」

絶対に本心からは言わなそうな妄言を口にしながら、柎詩織ついでまじは俺の背中から退く。

口調のとりの奴で、男勝りな性格をしている。

だというのにポニーテールにまとめられた髪とその顔立ち、女性的なメリハリがあるため、柎が女であるということを忘れずに済んでいる。

しかし本人はそれを全く意識してないのか、さっきのようなことは割りと日常茶飯事だ。

背中にあたる二つの山は、男の夢が詰まってるのか非常に柔らかい。

「だいたい、女の子に重いなんて言うもんじゃないぞ？」

「……そんなこと言うなんてお前、変なモンでも食ったのか？ 手術してこいよ」

「なんで自分を女扱いしただけで手術をしないとイケないんだっ！」

「普段から男みたいなの振る舞いしてる奴を、今さらどうやって女に見ろってんだ。無理にも程がある。寝言は寝て言え」

窓の外には、遅刻しそうになっているのか、急いで学校に駆け込んでくる生徒の姿が見える。

別にそこまで急がなくてもいいだろうに。

「ぐっ、それを言われると何も言えないぜ……。で、でも一応あたしだって女らしくしてるつもりなんだよっ……！」

「……どこら辺がだよ」

「髪を纏めるゴムはしつかり選んだりしてるし、休みの日だってそれなりにオシャレするようになったし……」

「そんなのやる前に、口調と行動を直した方が女らしくなれると思うぞ？」

「その手があったか！」などと喚き散らしているが、なんでその考えが最初に出てこなかったのかが不思議だ。

まさか、口調と行動は女らしくしてるとでも思っていたのだろうか？

仮にそうだとしたなら、目が曇ってるとしか思えない。一度、眼科に行くことをおすすめる。

「で、なんでまた女らしくなりたいたいなんて言い出したんだ？」

「ん？ 特に意味なんてねえって。ただ、もうちょっと女らしくなりたいてって思ったんだよ」

「ふーん。別に今のままでいいと思うけどな」

その方が話しやすいし、変に女らしくならなくてもこっちの調子が狂っちまうからな。

「そうか？ お前が言うなら、そうなのかもしれないけど」

「正直、どっちでもいいけどな」

「適当かよっ！」

適当とは失礼な。俺は今のままの方が話しやすいが、女らしくなりたいならそうした方がいいって意味で、どっちでもいいって言ったんだ。

適当なんて言ってもらっちゃ困る。

「……ったく。お前、変わったよな。去年は話しかけても今みたいに返してくれなかったのにさ」

「それ、妹にも言われた」

「あたしやお前の妹だけじゃなくて、みんな口を揃えて言ってるよ。」

『あいつ、なんか変わったよな』って。何があったんだよ」

「異世界で勇者やって、魔王倒してきたんだよ」

それを聞いて柊はため息をつく。

「またその話かよ。国語の評定が二のお前にしたらよくできた話だと思っけど、そんなのじゃ小学生も騙せないって」

高校の評定は五段階評価で、五が最高で一が最低。

つまり、俺の国語の成績は最低を何とか逃れることが出来た程度のものでしかない。

「本当だったの。異世界に召喚されて、魔王を倒す旅をしてきたんだよ。結構辛かったぜ……」

「まだ言ってるし……。話す気ないなら無理には聞かねえよ」

諦めた風に息を漏らして、柊は自分の席に座る。

自分の席っていつても、俺の後ろの席だ。

……まあ、こんな反応でも仕方がない。

異世界に召喚されて勇者になって、魔王を倒すなんていうのは、柊からしたら小説や漫画の中だけのことでしかないんだ。

だから呆れられても文句は言えない。

これを分かってくれる人なんて、ひとりいれば十分だ。

「おはよう。相変わらずかしぎと詩織は仲がいいな」

俺がそんなことを思っている最中、上から唐突に声をかけられた。見知った声だったため、後ろに座っていた柊がいち早く反応を示した。

「おはよー、両希」

「自分から俺に話しかけてきてくれんのは、柊とお前くらいのもんだからだよ、両希」

実際、俺に自分から話しかけてきてくるなんていうのは、このクラスには二人しかない。

柊と、目の前にいる両希蓮也だ。

前のクラスはあと何人がいたが、クラス替えになってそいつらはバラバラになってしまった。

両希は俺の斜め後ろ、柊の隣の席に座る。

「そうだな。だが、幼馴染みに話しかけるのは当然だろ？」

「そんな風に平然と言えるところがカッコイイよ、お前は」  
なんの不幸か、俺の幼馴染みは美少女でなければ女の子ですらない、この男である両希蓮也なのだ。

長く伸ばした髪は無造作というよりも整えられた長さという感じ  
で、かけているメガネがクールな感じを引き立たせている。

簡単に言えばイケメンだということだ。

容姿端麗、成績優秀スポーツ万能。おまけにルックスがいいなんて、男からしたら嫉妬の対象になるだろう。

だが、そんな両希にも欠点がないというわけではない。出来れば、  
なかった方がよかった欠点があったりする。

「まさかとは思つが、今日もかしぎは藍霧真宵と一緒に登校してき  
たのか？」

「……まあな」

「くっ、羨ましいぞ！」

立ち上がり、拳を握りしめながら叫ぶように言ってきた。

欠点というのはこれだ。

両希は一途というかなんというか、良くも悪くも一直線に進んで  
しまうような性格をしている。そのくせに、方向音痴だから質が  
悪い。

一直線にしか進めないだけに、間違った方向に進んでしまっても  
切り返すことが出来ないのだ。

なんというか、凄く残念なイケメンなんだよな。

「かしぎ！ お前は今や『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』から  
狙われている身分だ！」

「だから『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』ってなんなんだよ…

…」

学校のアイドルなんてものが存在するのはそれこそ想像上の話だ  
けかと思ってたが、それにファンクラブや精鋭部隊があるなんても  
う、引くしかない。

俺の話を聞いて馬鹿にしない柊ですらも苦笑いをしてるくらいだ。

結構、ヤバイのではないかと思う。本気で。

しかもそれが幼馴染みとなつてくると尚更だ。

「『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』というのはだな

「いや、俺が聞きたいのはそんなことじゃなくて……」

「黙つて聞くんだけ！ かしぎ！」

「……」

諦めるしかなさそうだった。

なんで今日もそのことを聞かされないといけないのだろう。

俺たちが異世界から還つてきてから、毎日聞かされている。

最初こそ、その『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』とやらが気になったが、こう毎日聞かされてるんだから忘れられるはずがない。もしかしたら、魔王と戦ったときよりも過酷かもしれないぞ、これ。

「んんっ、気を取り直して。『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』というのはだな、この私立桃園高校に舞い降りた藍霧真宵<sup>めぐみ</sup>を称えるための会だ。

精鋭部隊として、変な虫がつかないように露払いなどもしている

んだ

「へー、そうなのかー」

「聞いているのか？ かしぎに詩織！」

「あたしも!？」

驚いたような声を上げた柊に「当たり前だ!」と一喝している両希の姿を見て、もうため息しか出ない。

いつもは傍観者である柊もいきなり巻き込まれて大変そうだ。

俺としてはひとりからふたりになったことで、負担が半分になったから喜ばしいことだ。

「全く……。かしぎよ、お前はいつたい我らが藍霧真宵<sup>めぐみ</sup>に何をしたのだ?」

「異世界で一緒に勇者してきた」

「嘘をつくな!」



バン、と机を叩きながら鬼気迫る表情で叫ぶ。

注目されそうな行動をしているのに誰も気に留めないのは、毎日の恒例行事になっっているからだ。

このときばかりは俺に話しかけてこないみんなが頑張れ、という眼差しを送ってきてくれる。　　ような気がした。

「異世界で勇者をしてきたなんて、幼稚園児でも騙されないぞ！」  
小学生から幼稚園児に格下げされていた。

「正直に白状したらどうだ？　そうすれば尋問をする必要はなくなるんだ」

「尋問って、おい。つーかよ、別に何もねえって。朝だつて俺の家に迎えに来るのは家が近いからつてだけだろうし……あ」

言ってから気づいてしまった。自分で暴露してしまったという事実に。

そういえば『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の奴らは、真宵後輩が俺を迎えに来てることを知れないようにされてたんだ。

「かしぎ！　なんて羨ましいことを！」

「ちよっ、泣きつくくな！　鬱陶しいだろバカ！」

「これが泣かずにいられるか！　お前には分からないだろ、この悔しさが！」

分からねえよ。俺は心の中で吐き捨てた。

とりあえず泣きながら抱きついてくる両希を押し返して、席に座らせて息をはく。

「俺と真宵後輩は別に恋人とかじゃねえし、あつちにもそんな気はねえだろうから安心しとけ。当分は彼氏が出来た、なんていう噂は出ねえよ」

「そうは言ってもだな？　我々が調べたところによると、こうやって藍霧真宵が他人と話してるなんていうのはかしぎ、お前が初めてなんだ」

この世界のプライバシーは、俺がいなくなつてた空白の五時間にも改訂されたのだろうか。

「こんな怪しげな団体に簡単に調べられるなんて、真宵先輩も迷惑しているに違いない。」

「二週間前までは何の接点もなかったかしぎと彼女がいきなり話すようになるなんて、何かがあったとしか思えないんだ。さあ、さつさと白状するんだ！」

「何もねえつての。この前から言っただろ？」

「あくまでも答える気はないみたいだな」

答えるも何も、本当のことを話しても信じてないのはそっちだろ

という言葉を俺は飲み込む。

信じてもらえないのは百も承知だからだ。

とはいえ、そうなると言い訳が思い付かないのが現状だ。

今までまるで接点がなかった俺たちが、いきなり一緒に行動するようになった理由。

そんなものがパツと思いつくはずもない。

「なら、夜の道は背中に気を付けることだ」

「おおっと、脅迫でもする気か？」

「これは脅迫じゃない。近々、我々『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』は容疑者・冬道かしぎに闇討ちをかける！」

「闇討ち！？ て、テメ、冬道になにする気だよ！」

「いや、闇討ちって言っただけじゃん。落ち着けよ、柊」

「これが落ち着けるかーっ！ ……ってなんで闇討ちされる本人が一番落ち着いてんだよ！」

両希の胸ぐらを掴みあげた柊は、そのまま見事なノリツッコミを繰り出して来る。

どうでもいいけど両希が青い顔してるから離してやってくれ。

「と、とにかく！ 夜はあまり外を出歩かないようにした方がいい」

「……お前つて『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の一員なんだよな？ なのに、なんで俺に闇討ちのこと教えてるんだ？」

「なんでって、そんなの僕とかしぎが幼馴染みだからに決まってるだろ」

俺は両希の発言に呆気にとられてしまった。

闇討ちを企てるような団体に入ってるくせに、やっぱり俺のことを心配してくれるんだな、こいつは。

「やっぱりカツコイイよ、お前」

「でもさ、忠告するくらいなら止めてやれよ」

言われてみると、確かに柊の言う通りだった。

「……」

おい、なんでそこで顔を逸らすんだ、両希。忠告はしてくれるくせになんで止めてはくれないんだよ。

「まあ、気を付けておくよ。なんせ、幼馴染みの忠告だからな」

「次に会うときは『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の両希蓮也だからな。覚悟しておけ！」

「それでも忠告はしてくれるんだ？」

「……」

そこは「しまった」みたいな顔をするような場面じゃないと俺は思う。

とりあえず、夜に出歩くときは背中に注意しておくか。この怪しい団体なら本当に闇討ちもやりかねん。

このあと担任の教師が教室に入ってきたため、話は一時中断することになった。

中世の欧州ヨーロッパのような宮殿。その王室に、一組の異界より召喚された男女の姿があった。

男は今の状況がまるで呑み込めていないのに対して、女は周りの状況など意に介した様子はまるでなかった。

無表情な顔の無感情な瞳。

それが、ヴォルツタイン王国の皇女の体を貫く。

「……ここはいつたいていどこでしょうか？ どうして私はこんな場所

にいるのか、説明してもらいますよ」

凜とした声が広い王室に響き渡る。

周りには武装した兵士がいるというのに、毅然とした態度のまま、皇女の元へと歩み寄っていく。

カツカツと響くブーツの音は、自分の存在を明確に示しているようにさえ思えるほど、堂々としたものだった。

皇女の目の前になると女は立ち止まる。

王座に座る皇女を見下ろすように位置取りながら。

「いきなりこのような場所に喚んだことには、お詫びを申し上げます。ここはグリタニア大陸のヴォルツタイン王国です。私はヴォルツタイン王国の皇女です」

「……………」

「何を言っているか分からないとは思いますが。我々は、異界より貴方達を喚び出したのですから」

「貴方達？」

皇女に言われてようやく男の存在に気がついたのか、女は後ろを振り返り男に視線を向けた。

しかし、すぐに興味をなくしたのか皇女に向き直る。

「喚び出したとはどういうことですか。異界、と言いましたが何故私たちを喚び出すような真似をしたんですか」

威圧的な口調に皇女はわずかに圧倒されながらも、冷静を保つ。

皇女が圧倒された理由など、単純明快だ。

喚び出した、なんていう魔法のような言葉を口にされたにも関わらず、あたかもそれを信じたかのように状況把握に努める冷静さ。もしも自分が同じ立場に置かれたら、このように振る舞うなんてことが出来るわけがない。

何もかもが分からない、何が起こるか分からない恐怖によって、そんな余裕は削られている。

息を呑み、慎重に言葉を選ぶ。

「あなた方をお願いがあって、喚び出しました」

「……なんですか、お願いとは」

「我々の世界を、救っていただけじゃないでしょうか？ 我々の世界を救えるのは、あなた方だけなのです！」

「嫌です。お断りします」

「えっ……？」

「どうして私がそんな真似をしなければならないのでしょうか？」

いきなり喚び出されて世界を救えだなんて……意味が分かりません。感情の籠っていなかった瞳に、鋭さが現れた。

女の言い分はもつともだ。いきなり見ず知らずの場所に連れてこられ、それで自分達の願いを聞けなんていうのはおこがましいにも程がある。

しかも願いが世界を救えというものだ。馬鹿げているとしか言いようがない。

「そんなものはあの人にも任せておけばいいんです。私には関係ありません。元の世界に還してください」

「で、ですが、我々の精鋭部隊は魔王に全く歯がたたず、もう異界の勇者に任せるしか」

「だからなんです？」

女の声が、焦る皇女の声の途中で割り込んだ。

「他人任せも甚だしいですね。魔王に勝てないから、異界から喚び出した勇者に丸投げですか？ 第一に、私には勇者なんて呼ばれる力は一切ありません。ただの一般学生に何を求めているんですか？」

「……」

皇女は女の言葉に答えることが出来ない。

一般学生という言葉が理解できないわけじゃないだろう。

ヴォルツタイン王国と呼ばれるここにも、学業を学ぶ場所がないわけではないだろう。

いくら世界が違えど、一般学生が何を意味するかは分かる。

選りすぐりの精鋭部隊が勝てない魔王と戦わせても、結果なんてものは考えるまでもない。

「分かりましたら早く還してください。もう一度言いますが、勇者ならあの人にも任せておけばいいんです」

「……私たちの国の言い伝えにあるんです」

ぼつりぼつり、と皇女は呟いていく。

「『天剣』と『地杖』に導かれし勇者が舞い降りるとき、混沌とした世界に光をもたらす。金の刃と銀の杖、現れし勇者に授けるべしと」

「よく有りがちな設定ですね。聞こえは良いように聞こえますが所詮は、他の世界から来た人間に丸投げしてるのと同じですよ？」

女は決して首を縦に動かそうとはしない。

悉くを否定し、皇女の期待をどんどん削ぎ落としていく。

「『天剣』と『地杖』、でしたっけ？ そんなものがあるなら最初から使えばいいじゃないですか」

「……『天剣』と『地杖』には意思があるんです。この二つが選んだ者でなければ、使うことは出来ません」

「それは残念でしたね」

「あなた方は『天剣』と『地杖』に選ばれました！ あなた方しか

……世界は救えないんです……」

拳を強く握りしめ、唇からは血が一筋流れ出ている。

強く噛み締めた証拠だ。

この皇女も魔王から世界を救うために最善を尽くし、出来る限りのことをしてきたのだろう。

それでも、駄目だった。

だから最後の手段として、『天剣』と『地杖』に選ばれたこの二人に世界を救って欲しいと願っているのだ。

そのことが分からないわけではない。

だが、それでも。

「だからなんですか？」

皇女の胸に、言葉が突き刺さる。

「何故私が見ず知らずの他人のために、そんな危険を犯す必要がある

るのでしょうか？ 何のメリットもなく、デメリットしかない願いを聞く理由は ありません」

これとないくらいに、女の言葉は止めとなった。心臓が止まる思いだった。

最後の手段として『天剣』と『地杖』によって選ばれた者を召喚し、懇願した結果がこの様だ。

一概に召喚するといっても、無数に存在する異界から、たった二つを見つけて出して召喚する。それは砂漠の砂の中から小さな真珠を見つけて出すようなもの。

苦労して、ようやく見つけ出した希望は、淡い泡として消え去った。

皇女や、周りの兵に絶望の色が見え始める。

「さあ、早く還してください。あの人なら置いていきますから。勇者なら、ひとりいれば十分でしょう？」

皇女は答えられない。もう、言葉が出てこない。

女の言葉の通りであるならば、言い方は悪いがこんな女に頼みはしない。しかし、それでも頼み続けた。

すなわち、勇者は必ず二人いなければならないのだ。

『天剣』と『地杖』に選ばれた、二人の勇者が。

「何をしてるんですか、早くしてください」

「……しばらく還ることは、出来ません……」

かすれた声で発せられた皇女の言葉に、女は形の良い眉をしかめた。

「どういう意味ですか」

今までにないくらい鋭い声だった。

感情が籠っていなかった声に怒気が宿ったのが分かる。

「……あなた方二人を喚び出すには、大量のエネルギーが必要でした……。還すにしても、同じくらいエネルギーの充填が必要となります」

「何とかならないのですか？」

「こればかりは、時間をかけなければ……」

「どのくらいかかりますか？」

「貴女ひとりを選ずにしても、二年以上はかかります」

「二年！？ ふざけないでくださいっ！」

ここに来て女は初めて感情と言えるほどの感情をむき出しにして、皇女に向かって掴みかかった。

「明らかに丸投げする気だったんじゃないですか！ ふざけないでください！」

「……………」

掴みかかられた皇女の目には、まるで光が宿っていない。

頭を垂れ、女のなすがままにされている。

皇女がこんな風にされているというのに、護衛として周りに立っている兵は動く気配は一切ない。

絶望に支配され、誰もが動けないのだ。

最後の希望が泡のように消え去ろうとしている事實は、絶望を与えるには十分すぎるほどに十分だった。

だが、まだ消えたわけじゃない。

「おい、お前。還れねえからって皇女様に当たっても意味ねえだろ」  
今まで声を発することがなかった男の声が、絶望に満ちる王室に響き渡った。

午前中の授業はしつかりと夢の中で受けていたため、あつという間に過ぎていった。

両手を上に上げて、凝り固まった体をほぐす。

黒板を見る限りだと今の授業は物理だったみたいだが、俺の机に置かれている教材は数学だということは気にしない。

ちなみに数学があったのは一限目。

……ずいぶんとよくお眠りになってたんだな、俺。



「やっと起きたのかよ、冬道。どんだけ寝りゃ、気が済むんだ？」  
黒板に書き記された授業内容を、柊は綺麗にまとめながら呟くように俺に言ってきた。

その性格に見合わず、綺麗な文字は見やすく丁寧にまとめられている。

「若いから眠くなるんだよ。それにあれだ、授業で聞いている先生の話って子守唄みたいで眠くならねえ？」

「あつ、それはあるな。特に分からねえところって『あー、もうやっつてらんねえ』って感じになってさ」

「よく分かってんじゃん。俺の場合はそれが全部だ」  
「勉強しろ」

驚くほど冷たい声で言われてしまった。

高校の授業で習ったことなんて社会に出たら何の役にも立たないのに、なんでこんな苦勞して学ばないといけないんだろう。

数学や国語ならまだしも、物理なんか学者にでもならなきゃ使う場面なんてない。言い切ることが出来る。

……なんていう、中高生ならありがちな思考をシャットアウトする。

意味がないのは分かってるけど、高校を卒業できないと就職とか厳しいからな。やるときはやらないといけない。

その点、柊は真面目だと思う。

男勝りな性格のくせに、こういうところは真面目なんだよな。

ふと、腹の虫が抗議をあげていることに気づいた。自己主張の激しい腹の虫をなだめるために、俺は購買部へと向かうことにする。

俺は料理なんて出来ないから、弁当なんか作ったりしない。

妹のつみれに任せてもいいけど、さすがにそこまでやらせるわけにはいかないから、いつも昼飯は購買部がコンビニで済ませてる。

俺の家は親が共働きで、普段は家に帰ってこない。

仕送りはちゃんとされてるけど、金の管理はつみれに任せてる。

妹に小遣いをもらう兄って、物凄いシニールな光景だと思う。

「冬道かしぎ先輩はいますでしょうか？」

廊下の方から、聞き親しんだ声が入ってきた。

声をかけられた生徒は、学年が下の生徒が相手だというのに、圧倒されているように見えた。

そいつは俺のことを見つけると、教えてもらった生徒に礼を言うことなく、堂々と俺の方に向かってきた。

「また来たのか、真宵後輩よ」

「またとはなんですか。嬉しくはないんですか？」

「嬉しい嬉しい超嬉しい。大好きだぜー、真宵後輩」

冗談で言った言葉に両希を含めた何人かのクラスメートが反応していた。

なるほど。お前らが俺に闇討ちを仕掛けようとしてる『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』か。顔は覚えたぞ。闇討ちしようものならお前らには手加減しないからな。

「先輩が口先だけなのは分かってます。早く行きましょう。ここは不快です」

「はいはい、分かったよ。購買部に寄ってからでいいだろ？」

「行く必要はありません。先輩の分のお弁当は、私が作ってきましたから。足りないというならば構いませんけど」

……俺に突き刺さる重圧が五倍増しになった気がする。いや、間違いない五倍増しになっただろう。

『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の奴らにとって、真宵後輩の手作り弁当というのはどんな高級料理にも勝る一品だ。

それを俺がもらうもんだから、嫉妬してるに違いない。

俺はこの重圧に気づかないフリをしながら、真宵後輩の背中を押して教室から出ていく。

二学年の廊下を通ると嫉妬の重圧はさらに重いものとなり、そこを抜けて屋上へと行くための階段まで来るとようやくそれはなくなつた。

「どうしたんですか？ そんなに急がせて。そこまで空腹だったん

ですか？」

「そうじゃねえよバカ。分かってるくせに訊くんじゃねえよ」

「大変ですね」

「……おかげさまでな」

他人事のように言う真宵後輩に若干の怒りを感じながら、屋上の扉を開け、中に入る。

そこは落下防止用に鉄格子に囲まれてるだけで、何もない殺風景な場所だ。

屋上なんて高校にあっても使う人なんてほとんどいないから、俺たちがサボったり飯を食ったりするにはうってつけの場所だったりする。

「どうぞ」

「おう。サンキュー」

真宵後輩が持っていた二つの弁当のうち、青色の包みに包まれていた方を受けとる。

弁当を開けてみれば、見かけによらず可愛い中身をしていた。それに美味そうだ。ひとつひとつが手作りのようで、冷凍食品がないみたいだ。

「ずいぶん手のこんだ弁当だな。俺のために時間をかけてくれたのか？」

「残念ながら違います。今日はたまたまです」

「ですよー。頼んだわけでもないのになんで作ってきたんだろと疑問だったけど、どうせそんなことだろうと思っただよ。」

真宵後輩が俺のために弁当なんか作るわけがない。

「ですが」

「むぐ？」

「……手をつけるのが早いですね。いいですけど。もし先輩が私の手作り弁当を食っていたら、毎日作りすぎますがどうしましよっ？」

直接作ってくるって言わないのが、真宵後輩らしいな。

「じゃあ毎日作りすぎてもらうとするかな」

「分かりました。では、楽しみにしておいてください」

楽しみにすると同時に、嫉妬の重圧を受けることになるんだろうけど、気にしないでおくとしよう。気にしてたら埒があかない。

見た目通り味が美味かったため、会話をする事もなく弁当を平らげてしまった。

真宵後輩はまだ半分も食べてないが。

「そういえば、さっきだな」

「なんですか？ ……むぐ」

「お前が俺の家に迎え来てるの、バレちゃった。スマン」

「別に構いませよ。バレたからといって、私には何の害もありませんから」

そうだったよ。こいつは自分に害がなかったら、自分のことでもどうでも思う奴だったよ。

「前々から気になってたんだけどよ、なんでお前、わざわざ俺と弁当を食おうとするんだ？ 迎えに来んの面倒じゃね？」

「その程度なら面倒だとは思いません。それに、食事は楽しくとりたいですから」

「クラスで友達とかいねえの？」

「……いますよ」

どうやら、クラスには馴染めていないようだった。

この性格じゃ、馴染めないのも仕方ないか。

でも、食事を楽しくとりたいていうのは嘘偽りのない本心からの言葉なのだろう。それは俺も共感できる。

「クラスで食事をするよりも、癪ですが先輩と一緒にの方が楽しいですし、楽ですから」

「クラスの連中と一緒に俺は楽しいが、やっぱりお前と一緒にの方が楽しいし楽だな」

普通の話題で話してもいいが、真宵後輩と異世界での話をしてた方が楽しく感じる。それ以外でも楽しく感じるけどな。

別につまらないってわけじゃない　　けど、満たされないっていうこともまた事実。

正直にいうと、真宵後輩には気を使う必要がなくて楽だ。お互いに家族みたいに接しても何の問題もない。

「お前つてスゲー人気だよな。ファンクラブとかも出来てさ」

「いい迷惑です。付きまとわれたりもしますし、この前なんてストーカーまでいましたから」

「……アイドルかよ。で、そいつはどうしたんだよ」

「あまりにもしつこいので、少しだけ懲らしめたらついてこなくなりました」

「使ったのか？」

「少しだけです。『地杖』は使ってませんから、そこまでの効力はありませんよ」

弁当を頬張る様子は非常に可愛いのだが、言ってることが危険だった。

それに真宵後輩の言い方からすると、こっちでも普通に使えるみたいだ。

「そんなに使う場面があるわけじゃないし、たまになら使つといた方がいいかもしれねえな。……いつ喚ばれても、いいようにな」

「そうですね。また喚ばれるとしたら、魔王が現れたときくらいでしょうから」

そのときに戦えませんかなんて言えないからな。

元勇者つていつても、あつちの世界に行ったら勇者になるんだ。

使い方を忘れるわけにはいかない。

……まあ、忘れることなんてないだろう。あれだけ必死に鍛練したんだ。簡単に忘れられるはずがない。

たまになら『天剣』を使ってみてもいいかもしれない、そんなことを思う昼休みだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9097z/>

---

氷天の波導騎士

2012年1月2日08時48分発行